

主 題：偽りの弟子に見られる症状

聖書箇所：ヨハネの福音書 8章37－47節

この朝、続けて皆さんと学んでいきたいのは、ヨハネ8：37－47です。タイトルにもあるように、きょうは偽りの弟子に見られる症状について、一緒に考えたいと思います。いつものように、みことばをお読みします。

ヨハネ8：37－47

「:37 わたしは、あなたがたがアブラハムの子孫であることを知っています。しかしあなたがたはわたしを殺そうとしています。わたしのことばが、あなたがたのうちに入っていないからです。:38 わたしは父のもとで見たことを話しています。ところが、あなたがたは、あなたがたの父から示されたことを行うのです。」:39 彼らは答えて言った。「私たちの父はアブラハムです。」イエスは彼らに言われた。「あなたがたがアブラハムの子もなら、アブラハムのわざを行いなさい。:40 ところが今あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに話しているこのわたしを、殺そうとしています。アブラハムはそのようなことはしなかったのです。:41 あなたがたは、あなたがたの父のわざを行っています。」彼らは言った。「私たちは不品行によって生まれた者ではありません。私たちにはひとりの父、神があります。」:42 イエスは言われた。「神がもしあなたがたの父であるなら、あなたがたはわたしを愛するはずです。なぜなら、わたしは神から出て来てここにいるからです。わたしは自分で来たのではなく、神がわたしを遣わしたのです。:43 あなたがたは、なぜわたしの話していることがわからないのでしょうか。それは、あなたがたがわたしのことばに耳を傾けることができないからです。:44 あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。:45 しかし、このわたしは真理を話しているために、あなたがたはわたしを信じません。:46 あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか。わたしが真理を話しているなら、なぜわたしを信じないのですか。:47 神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。」

皆さんも一度は聞いたことのある名前かと思います。アップルの創業者であるスティーブ・ジョブズ氏は、2003年にCTスキャンを受けた際、すい臓に影があると診断されました。幸いその時に見つかったすい臓がんは、成長が最も遅いもので、治療しやすい状態にありました。しかし、そのような診断を受けた後、彼は早期の手術を勧める医者声を約9か月にわたって拒み続けました。また、かたくなだった彼は、自分で病への向き合い方を考え、判断し、食事療法や針治療などの代替りの手段を選択しました。その結果、彼のがんは手術を選んだ時点で、すでにほかの箇所に転移していました。一度は、手術を受けて助かったものの、がんを再発させ、56歳の若さで亡くなることになったのです。ある時、「なぜ手術を早く受けなかったのですか」と問われたジョブズ氏は、次のように答えました。「自分の身体を切り開かれるのが嫌でした…そんな形で自分の身体を傷つけられなくなかったのです。」と。本来であれば、彼にとって医者は敵ではなく、彼を気にかける身近な助け手のはずでした。がんの診断は、攻撃ではなく、優しさであり、手術をして病を取り除くことは、恐怖を与えるものではなく、彼のいのちを救うものでした。しかし、自分のやり方で大丈夫だと確信し、助けを拒んできちんと病に向き合わなかった結果、深刻な結末が彼の身にもたらされました。自分のうちでむしばんでいる病と正しく向き合わないことは、非常に危険なことでした。

そして、これはまさに私たちが見ている場面にも言えることです。イエス様は今回の場面で、何度も何度もとてもきびしいことばを投げかけていました。特に、44節で、イエス様はご自分の周りにはいる群衆に対して、大胆にこのように述べていました。「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。……」と。このようなことばを聞くと、ある人たちは居心地の悪さを感じます。あわれみ深い救い主が、ここまできついことばを発するはずはないと。しかし、このことばこそ、人のうち側をご覧になられる正しい御子のあわれみに満ちた診断結果でした。人の永遠のことを何よりも気にかけておられるたましいの医者、イエス様は、彼らのうちにある深刻な病に、素知らぬ顔をすることができなかつたのです。

この時、イエス様が話をしていた人たちの多くがどのような人たちだったか覚えていますか？30節のところでもこのようにはっきり書かれていました。「イエスがこれらのことを話しておられると、多くの者がイエスを信じた。」と。イエス様の周りにいた人たちは、世の光である救い主のことばを聞いて、「イエス様を信じます」と口にしていた者たちでした。彼らは、自分たちが救われているのは当然のように思っていました。アブラハムの子孫である自分たちこそ、自動的に神の国、天国へ行くものだと確信していました。ほかの人がどうであれ、自分たちは何の問題もないと、このままで大丈夫だと確信していたのです。だからこそ、イエス様は、繰り返し、繰り返し彼らが見るべき現実を突きつけていました。あなたは信じていると思っているかもしれませんが、そうではありませんと。もしあなたがたがこのまま私のことを信じなければ、あなたは自分の罪の中で死ぬことになりますと。もし真理である私を信じるのなら、罪の奴隷であるあなたも本当に自由になれるのですと。救い主のきびしい警告は、裏を返せば、確かな愛に満ちあふれた救いの御手でした。

しかし、かたくなだった人たちは、残念ながらイエス様のことばにいっさい耳を傾けようとしませんでした。表面上は、本当の弟子に見えたとしても、実際は全く救われていなかった偽りの弟子、彼らにはいくつかの危険な症状が見られました。きょうはその点をいっしょに考えてみたいと思います。先週は、皆さんといっしょに真の信仰に見られる二つの特徴を通して、自分自身のことを吟味しました。今週は、その反対に偽りの弟子に見られる四つの症状、四つの特徴を見ることを通して、聖書が描いている救いについて、改めて考えてみましょう。そして、ぜひ自分自身に問いかけ続けてください。自分自身の信仰が本物なのか、それともそう思い込んでいるだけなのか——。このみことばが皆さんの励ましと助けになることを心から祈っています。

○偽りの弟子に見られる特徴：四つの危険な症状

1. 偽りの弟子は主のことばに聞き従わない 37-41a節

では、早速一つ目から見ましょう。偽りの弟子に見られる一つ目の症状は、主のことばに聞き従わないということです。偽りの弟子は、主のことばに対してすなおに耳を傾けない者でした。37-38節に人々の抱えていた問題が、このようにまず記されています。「:37 わたしは、あなたがたがアブラハムの子孫であることを知っています。しかしあなたがたはわたしを殺そうとしています。わたしのことばが、あなたがたのうちに入っていないからです。:38 わたしは父のもとで見たことを話しています。ところが、あなたがたは、あなたがたの父から示されたことを行うのです。」と。イエス様の周りにいた群衆の多くは、信じますと口にしていた人たちでした。仮に外側だけで判断するのなら、彼らは健全な弟子のようにも思えました。しかし、すべてのことをご存じだったイエス様は、最初から彼らのうちに殺意が潜んでいることに気づいていました。イエス様は、彼らがイエス様ご自身のことばを聞いていながら、本当の意味では聞く気がないことに初めから気づいていたのです。なぜ群衆は主のことばを聞いていながら、それを聞き入れることができなかつたのでしょうか？その問題をイエス様がはっきりと診断していました。37節の後半をもう一度よく見ると、このように書いています。「……わたしのことばが、あなたがたのうちに入っていないからです。」と。

▶内に入っていない

興味深いのは、ここに出てきていた「うちに入っていない」という表現です。この「うちに入っていない」という表現は、だれかや、何かのために場所を空けるや場所を作るとのことばの前に、それを打ち消す否定語がついたものでした。言い換えるとすれば、このことばは、だれかが入る場所が空いていない状態や何かを入れるすきま、余地がない状態を表すものでした。皆さんも冷蔵庫や棚に何かを後から入れようと思ったことがあると思います。中がパンパンになっていたら、もう入れることはできないのです。このことばは、そのようなもう受け付けることができない状態を表しました。実際このことばが持っている意味の様子を聖書でもわかりやすくこのように見て取ることができます。マルコ2：2に「それで多くの人が集まったため、戸口のところまですきまもないほどになった。この人たちに、イエスはみことばを話しておられた。」と。イエス様が話していた家の中の様子はどのようなものだったか想像できますか？「すきまもないほど」だったと言われていました。家の中は人でいっぱいにあふれかえっていて、これ以上は入るすきまがない状態でした。もうほかの人のために場所を空ける余裕がなかったのです。

そして、それこそがまさにこの時のユダヤ人たちの心の状態だと言うのです。彼らはイエス様のことばを確かに聞いてはいました。しかし、残念ながら、彼らのうちにはそのことばをとどまらせておく場所がなかったのです。聞いたことばは、すべて右から左に流れていきました。彼らのうちには主のことばを聞いて、それをすなおに信じ受け入れ、従おうとする従順な心が存在していなかったのです。すこし立ち止まって考えてみてください。今も多くの人たちが、神様や聖書についていろいろな場所で聞いています。幼い頃から教会に通っていれば、日曜学校で何度も、何度も聖書の話は聞いています。日曜に教会にやって来れば、講壇から語られるメッセージも聞いています。多くの人たちが神様のことばを聞いてはいます。ある者は聞いているからこそ、正しい答え、模範回答を口にするさえできます。それでは、本当の弟子と偽りの弟子の違いは何なのかと言うと、そのことばがうちにとどまり続けているかどうかでした。どのような時もみことばをうちにとどまらせ、喜んで従っていききたいという願い、熱意があるかどうかでした。偽りの弟子は、たとえみことばを通して神様が喜ばれることを聞いたとしても、それを心で拒んで、いつまでも本当の意味で従おうとはしません。なんとか聞いたことばに従わないでいい理由を探して、そして、自分自身を納得させようとするのです。まさにそれが群衆たちの応答でした。

イエス様のことばを聞いた群衆の応答が39節に、このように書かれていました。「彼らは答えて言った。「私たちの父はアブラハムです。」……」と。不思議に思った人もいるかもしれません。なぜならイエス様はこの事実を知らなかったのでしょうか？イエス様はこの事実を知っていました。37節に戻ってみるとイエス様は「わたしは、あなたがたがアブラハムの子孫であることを知っています。……」と言っていたのです。イエス様は知っていました。しかし、彼らはあえてまたそのことを言うのです。「私たちの父はアブラハムです。」と。どうして口にしたのでしょうか？それは彼らの持っていたプライドでした。彼らは、イエス様のことばにすなおに耳を傾けるよりも、自分たちの立場を正当に主張しようとしていました。私たちは、ほかのだれでもない「アブラハムの子孫」ですと。彼らはその立場が自分たちを神様の前に正しくすると信じていました。特別な血筋を持っている、「アブラハムの子孫」である自分たちこそ、それにふさわしく生きていると思い込んでいました。神様の基準ではなく、自分たちの基準に当てはめて、自分たちこそが、当然神の民と呼ばれるのにふさわしいと誇りを持っていたのです。

しかし、それこそが神様から出ていない偽りの弟子の危険な症状でした。彼らはことばでは信じますと、愛していると言っていました。けれども、どのような主張をしていたとしても、生き方がそれにマッチしていなかったのです。ですから、イエス様はその点を指摘しました。39節の後半から41節までこのように続いています。「……イエスは彼らに言われた。「あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行いなさい。：40 ところが今あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに話しているこのわたしを、殺

そうとしています。アブラハムはそのようなことはしなかったのです。:41 あなたがたは、あなたがたの父のわざを行っています。」……」と。

▶アブラハム

アブラハムとはどのような人でしたか？いろいろなことを言えると思います。しかし、少なくとも挙げるとしたら、アブラハムは、何よりも神様のことを信じた人でした。私たちがよく知っている箇所の一つかもしれませんが、創世紀15:6にこのように書いていました。「彼は【主】を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」と。アブラハムという人物は、神様を信じる人物でした。また、彼は神様のことばを聞いた時、たとえ自分に理解できなかつたとしても、神様に喜んでついて行こうとした者でした。ヘブル11:8にこのように書いています。「信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかわからないで、出て行きました。」と。彼はどこに行くのかわっていたから、その答えを持っていたから出て行ったのではありません。ことばを与えた神様が誠実なお方であることを知っていたからこそ、彼はそのことばに身を委ねようと思いました。そのことばに従ったのです。また、アブラハムは、たとえ自分に理解ができなくても従っただけではありません。アブラハムは神様のことばを聞いた時、それが自分にとって受け入れがたいことであつたとしても、神様に従おうとした人物でもありました。皆さんも覚えていると思います。神様がアブラハムに対して自分の息子のイサクをいけにえとしてささげなさいと命じた時、父親として当然、混乱や悲しみは覚えたでしょう。しかし、彼は神様の約束を信頼して、そしてそのことばに従いました。同じヘブル11:17-19に「:17 信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。:18 神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」と言われたのですが、:19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。」と記されています。信仰と従順、これがまさにアブラハムの生き方そのものでした。そのような彼も何度も罪を犯すことはありました。しかし、それでも主と主のことばの前にへりくだって、どのような時も主に従って歩んで行こうとしていたのです。悲しいことに、自分は大丈夫だと確信していた群衆の歩みは、これとは全く異なるものでした。彼らは神様と自分は関係があると口にしていながら、自分たちがアブラハムの子と言いながら、生き方はその告白とはかけ離れたものになっていました。神様のことばにかたくなになり、彼らは耳を傾けようとしていなかったのです。

果たして、私たち自身はどうでしょうか？神様のことばは、私たちにとって時に理解ができないような、受け入れがたいようなこともあります。しかし、たとえそうであつたとしても、へりくだって従っていきたくて歩んでいるのでしょうか？それとも、いつもいろいろな理由を挙げて、従順に生き続けていくことを拒み続けているのでしょうか？神様のことばをただ聞いているだけの者でしょうか？それとも神様のことばに聞き従う者として日々を生きているのでしょうか？一つ考えられることがあります。私たちが口で告白して信じている信仰と実際の生き方の間にあるギャップが、次第に、次第に狭まっているのでしょうか？それともいつまでも成長せず変わらないままでしょうか？神様に従い続けていくのなら、みことばに従い続けているのなら、神様が私たちを変えてくれているはずですが。いろいろな理由を持ち出して、主のことばにすなおに聞き従おうとしない、それが一つ目の偽りの弟子に見られる危険な症状でした。

2. 偽りの弟子は主を愛さない 41b-43節

次に偽りの弟子に見られる症状の二つ目は、主を愛さないことです。偽りの弟子は、主に對する愛に欠けた者でした。みことばに戻っていただいて、41節の途中からこのように続いています。「……彼らは言った。「私たちは不品行によって生まれた者ではありません。私たちにはひとりの父、神があります。」:42 イエスは言われた。「神がもしあなたがたの父であるなら、あなたがたはわたしを愛するはずですが。なぜなら、わたしは神

の主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。このキリストに、栄光が、今も永遠の日に至るまでもありますように。アーメン。」と。これがペテロの歩みそのものでした。自分が受けた恵みと愛、自分のことを愛してくれたイエス様とイエス様に関する知識において成長し続けていました。したがって、彼はほかの人もそのようにするようにと励まし勧めたのです。何度もつまずいても、主への愛において絶えず成長を目指して、歩み続けていたのがペテロでした。

そして、私たちも彼の足跡に習って生きていくことができます。私たちも絶えず失敗しても、主を愛する者として、歩み続けていくことができます。そうだとすれば、イエス様を心から愛する者として、私たちは日々愛において成長し続けているのでしょうか？ もっと言えば、私たちはイエス様を愛しているからこそ、この方のことばにすなおに聞き従うことで成長し続けているのでしょうか？ イエス様への愛は、単なる感情的な話で終わるものではありません。気持ちの乗っている時だけ、自分に都合の良い時だけ示すものではありません。聖書が教えている愛は、救いを成し遂げてくださり、恵みを与えてくださった救い主への感謝の応答として、自分を捨てて、そして主のことばに喜んで従っていく従順さを伴うものでした。ヨハネ14：15でイエス様も言われていました。「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずで。」と。偽りの弟子は、神様を愛していると口にはしていました。しかし、御子に対する愛に欠けていた彼らのうちには、本当の愛はありませんでした。主を心から愛そうとせず主のことばに聞き従わない者が、二つ目の偽りの弟子に見られる危険な症状でした。

3. 偽りの弟子は別の父を愛している 44節

続けて、偽りの弟子に見られる三つ目の症状は、別の父を愛しているということです。より具体的に言うのなら、偽りの弟子は悪魔を自分の父として愛している者でした。8：44でこのように書かれています。「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」と。ここまで、いっしょに見てきましたが、見ていく中で気づいたかもしれません。イエス様は群衆に対して繰り返し、繰り返し「あなたがたは、あなたがたの父から示されたことを行っています」とか、「あなたがたの父のわざを行っています」と述べてきました。彼らの父がだれなのかをここまでは具体的に言うことはなかったのです。

しかし、ついにここでイエス様は、その正体を明らかにしていました。彼らが持っていた父の正体は、悪魔、サタンでした。このことばを聞いた群衆がどのような様子だったか思い浮かべてみてください。何度も言いますが、彼らは自分たちこそ神の国、天国を受け継ぐアブラハムの子孫だと思っていました。自分たちこそ神様を父として持ち、個人的に神様を知って礼拝し従っている神の民だと確信していました。しかし、そのような人たちに向かってイエス様は、「あなたがたの父は悪魔です」と言うのです。あなたがたは「悪魔から出た者」ですと。あなたがたは、「あなたがたの父である悪魔」が喜ぶことを求めていますと。これを聞いた者たちは、間違いなくショックを受けたでしょう。この人はいったい何を言っているのだと顔を赤くし、怒りを表していたでしょう。この8：44のイエス様のことばほどきびしく、ある意味で傷つけることばに聞こえるものはないかもしれません。しかし、これが、イエス様が示した本当の愛でした。イエス様は常に優しく、穏やかなことばだけを語っていたわけではありません。人の感情や機嫌を損なうことを恐れて、真理をぼかすことをしていたわけではありません。相手のうちに根付いている致命的な罪の病を見たのなら、それを取り除くためには、時にメスを使うこともありました。人々の永遠を気にかけておられたあわれみ深い救い主は、彼らが見なければならぬ現実を、愛を持って突きつけ続けたのです。

そして、この現実は今も昔も何も変わっていません。イエス様を愛しておらず、拒んで生きている人たちが、すべての罪人が仕えているのはサタンだということです。これは勘違いしてはいけません。この世に

生まれてくる罪人は、最初に神様かサタンかどちらを自分の父にするのか選択するものではありません。かわいい赤ちゃんであれ、真面目に生きてきた年配の方であれ、私たちはみな例外なく生まれながらに「空中の権威を持つ支配者」サタンを愛して、サタンを喜ばせ、サタンに従うものでした。エペソ2：1-2にこのように書いていました。「:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、:2 そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従つて、歩んでいました。」と。中間地点にいるわけではありません。神様を父としていない者の父はサタンでした。そして、これが確かな現実であるからこそ、主を信じ従わない者たちの歩みのうちには、その父である悪魔の特徴を見ることができました。どのような特徴かと言うと、いろいろなことを挙げるができますけれども、少なくとも二つのものを今回の箇所から見て取ることができます。

●二つの特徴

1) 分裂を引き起こそうとする

まず悪魔の特徴の一つは、分裂を引き起こそうとするということです。

▶「悪魔」(ギリ語：ディアボロス＝「間」「ディア」＋「投げる」「ボロス」)

分裂を引き起こそうとするとは、44節に出てきました悪魔という名前、ギリシャ語では“ディアボロス”ということばも使われたりしますけれども、これは、もともと「間」を表す“ディア”と、「投げる」を表す“バロ”(ボロス)がくっついてできたものでした。何かを間に投げるものです。そして、ここから、「中傷する者」とか「偽りや陰口を言う者」という意味を表しました。当たり前ですがけれども、中傷や陰口、噂話があるところには何がありますか？そこには一致がありますか？一致ではなく、非難や争いがあります。悪魔という存在は、常に悪意ある何かを何かの間に投げて、分裂を引き起こそうとするものでした。もし主が喜ばれる一致ではなくて、争いや分裂を求めているのなら、その生き方は悪魔の特徴を表しているということです。

2) 真理ではなく偽りを求める

また、もう一つの特徴は、真理ではなく偽りを求めるということです。悪魔は最初から偽りを話して神様に逆らうことを望む者でした。エデンの園で彼は何をしましたか？神様が食べれば必ず死にますと言われたことばに対して、真っ向から反対し、決して死ぬことはありませんと嘘をつきました。アダムとエバをだました結果、死がこの世に入りました。悪魔は、初めからいのちを憎み、偽りを愛するものでした。もし主が喜ばれる真理ではなく、神様に敵対する偽りや罪を求め続けているのなら、その生き方は悪魔の特徴を表しているのです。なぜ聖書の中で私たちが一致を求めることや、真理に立ち続けることを言われ続けているのでしょうか？それはかつて悪魔を父としていた生き方が、その特徴を持っているからでした。そこから助け出された者として、救い出された者として、一致を求め、真理に立つ者として、私たちは変えられたというのです。Iヨハネ3：8、10にこのように書いています。「:8 罪を犯している者(犯し続けている者)は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。……:10 そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行わない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。」と。残念ながら、偽りの弟子であった群衆は、間違つた父を持っていました。神様を愛していると疑っていなかった彼らは、実際は神様を愛しているのではなく、逆に悪魔を愛し、そして、その真理を拒む者たちでした。果たして、私たち自身はどうでしょうか？どのような時も義を行う者として、義を愛して、神の子どもとして生きていこうとしているのでしょうか？それともかたくなに罪を犯し続けて、真理を嫌って悪魔の子どもとして歩み続けているのでしょうか？もう一度言いますが、中間地点はありません、今どっちかとして歩んでいます。主ではなく、別の父、悪魔を愛して、真理を拒絶する者が、三つ目の偽りの弟子に見られる危険な症状でした。

4. 偽りの弟子は主を信じない 45-47節

そして、最後にもう一つだけ、偽りの弟子に見られる症状の四つ目は、主を信じないということです。偽りの弟子は、結局のところイエス様をすなおに信じ受け入れない者でした。みことばに戻っていただいて、残りの45-47節にこのように書いています。「:45 しかし、このわたしは真理を話しているために、あなたがたはわたしを信じません。:46 あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか。わたしが真理を話しているなら、なぜわたしを信じないのですか。:47 神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。」と。イエス様の訴えはいつも変わりませんでした。父なる神様から遣わされた世の光として、イエス様は常に真理を語り続けていました。

また、イエス様は単に正しいことを口にしていただけではなくて、どのような時も正しい者として生きていました。だからこそ、だれかがイエス様の歩みを見た時に、罪を責めることができる者は、だれもいなかったのです。この場にいたユダヤ人たちも同じでした。またほかにもイエス様の歩みに少しでも目を留めた者たちは、皆同じ結論にたどり着いていました。たとえば、十字架にかかる前、取り調べを行ったローマ総督ピラトも、ヨハネ19:6のところでも人々の前でこのように言っています。「……ピラトは彼らに言った。「あなたがたがこの人を引き取り、十字架につけなさい。私はこの人には罪を認めません。」」と。また、十字架を目撃していた百人隊長もルカ23:47でこのように口にしました。「この出来事を見た百人隊長は、神をほめたたえ、「ほんとうに、この人は正しい方であった」と言った。」と。イエス様が真理であることは、だれの目にも明らかでした。しかし、生まれながらの罪人はみな、それをかたくなに拒むということです。たとえ真理を目の前にしたとしても、それを知ろうとも従おうともせず、愛そうとも信じようともしませんでした。だからこそ、偽りの弟子、すべての罪人は、自らの意思で、今も永遠の滅びへと向かっているのです。

きょう、私たちはこのみことばが示す診断結果をともに見ました。そして、もしみことばの示す診断結果を自分に照らし合わせて、自分のうちに主のことばに聞き従う意思や主への愛が全くなく、悪魔の願いを喜び求め、そして、主への信仰が全くないのなら、あなたはまさに滅びへと向かっている深刻な病を抱えていると言えるのです。それがあなたの状態だということです。しかし、感謝なことに、まだ救いの道は残されています。悪魔を父親として、歩んでいるあなたにも、罪の病を取り除く、唯一の手段が残されています。それは、御子イエス・キリストを自分の救い主、主として、信じ受け入れることです。同じヨハネ1:12-13で、ヨハネはこのようなことばを残していました。「:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。:13 この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」と。どのような血筋も人に救いをもたらすことはありません。だれも自分の努力や知恵で、新しく生まれ変わることはできません。

しかし、自分の罪を心から認めて、すなおに悔い改め、イエス様が自分の罪のために死んでよみがえってくださった救い主、主であると信じるのなら、そのような人を神様は新しく造り変えてくださるというのです。それが約束でした。主のことばに喜んで従い、主を心から愛して、神様のみこころをどのような時も求め、どのような時も主を信じる神様の子どもとして、神様ご自身が私たちに造り変えてくださるというのです。それがすばらしい希望でした。だからこそ、自分自身のうちにある病に気づいた人がいるのなら、どうかきょうその病と向き合ってください。あなたのことをむしばんでいる深刻な病を、先延ばしにしないでください。

そして、その病を大きな恵みによって、取り除かれたことを知っている皆さん、喜んでいますか？ 本当に喜んでいますか？大きな手術を経て、自分自身をむしばみ続けていた苦しい病を取り除かれた人たちが、がんを取り除かれた人たちが、どのように応答しているか、私たちは見たことがあると思います。「たいしたことないよ」と応答しているのでしょうか？ 病を経験したことがある人は、よくわかっている

と思います。その時の安心や喜びは、ことばで言い表すことができないものでしょう。そうだとしたら、私たちはだれよりも喜ぶことができるはずです。私たちにとって、私たち自身にはどうすることもできない深刻な病を主イエス・キリストは、十字架の上で赦してくださいました。病を取り除き、罪人を救うために、救い主は来てくださいました。その方を信じる信仰によって、私たちはそれを取り除かれたのです。そうであれば、そのみわざを心から喜んで、感謝する者として、ともにこれからも続けて成長していきましょう。